

ふしみさらだボール子育て情報



「知的発達」

令和5年5月17日号

板橋富士見幼稚園



幼児期に知恵に繋がる力を育てよう

子どもは、1歳半頃から思考の働きが急速に発達していきます。自分の欲求を満たすために、泣いたり、大きな声で欲求したり、時には全身を使って抵抗し、周りへ必死で訴えるようになっていきます。

手をやく時期がやってきます。親はなんとか言い含め納得させようと必死になりますが、子どもも同じように必死に抵抗します。そして、ようやく自分の思いを果たすことが出来ると、手の平を返したように喜びの気持ち体一杯に表現してくれるのです。その姿を見た途端、すべてを許してしまうのが親心です。

さて、こうした経験は子育てをしていく上できっと誰もが経験していくことだと思いますが、そんな時子どもの内面ではどのような事が起きているのでしょうか。

まず、欲求やねだりは、自分が自分であることが少しずつ理解できるようになってきたことから始まります。自分で自分の名前が言えるようになったことがその証拠です。自分のことが分かるようになるということは、自己の欲求を他者に求めようと主張する力が芽生えているということなのです。

その欲求や主張に対し応ずるかどうか、親御さんはタイミングがとても難しいですね。実は、早すぎても遅すぎても、知恵に繋がる力には繋がらないのです。子どもが自分の欲求を相手に説得させるための手段を、あの手この手と試行錯誤する時間が、知恵を培う大切な時間になります。そして子どもの自立心や協調性、自己肯定感を育ち持つことにも繋がっていきます。



子どもだからと言って、場当たりの欲求に応じたり拒否したりしてしまうことは、知恵を学び蓄えようとする力を阻害してしまいかねません。「ダメ」は、危険が伴うときや親が必要と感じたときに、一貫して使うように心がけたいですね。

なるべく対話を続け、少しずつ子どもが納得する方向に誘導していくことが、とても大切な大人の役割になります。時には、このようなやりとりを楽しんでみてください。

【写真：泥遊びを先生と一緒に全身で楽しんでいます】